新著紹介

○鄉土研究圖譜　村落篇　第二輯　栃木縣　（附）解說一冊

小田内通敏編　東京本鄉大塚巧藝社内　鄉土研究圖譜刊行會發行　昭和八年十二月　會費二圓三〇錢

本圖譜第一篇長野縣に就いては本誌（第二十卷第五號）に紹介して置いた。編者小田内氏が栃木縣東部の巨刹東山雲巖寺で鄉土教育の講演をされたことが寄緣となつて、農業地理研究として最も興味と實益のある栃木縣の善き村落圖譜が第二篇となつて公にされた。圖葉の二十葉なることは第一篇と同樣で鹽谷郡栗山村の段丘の村落景觀から始めて、奥日光景觀圖に至る三十九の主として玻璃版の寫眞と少許の凸版とをおさめて居る。栃木縣は二宮尊德の開墾事蹟や明治以後の那須野開拓の歷史を有ち且つ傾斜十五度以下の平地に對する現耕地百分率が五八%で未耕地が多く後來の開拓餘地が廣い所である爲めに人文地理上甚だ問題の多い處である。寫眞版の悉くが面白いと共に寫眞解說はかなり委曲を盡して居る。殊に特殊研究の記事中磯邊秀俊氏の農業地理的考察は農作物作付の變遷及種類の分布を述べられて本縣農業の全貌を明にされてゐる。最も吾人の注意を惹くのは三大特產物たる葉煙草と大麻と扁蒲（干瓢）との分布が東西に東から西へ葉煙草、扁蒲、大麻と三帶を成してゐることゝ其の理由とである。猶解說には序說として風土と生活以下雷に就いての考察に到る八篇がある。尤も風土と生活の書き方はペダンチックとも思はれる樣な又は紹介子には讀んでも完全に理解出來ぬ樣な、例へば次の樣な章句がある。『然るに北部山地の開析せられた溪谷から流出づる諸河は、南部に展開してゐる平野を灌漑してこゝに村落の定住を基礎附ける耕地の可能を條件附けてゐる』。『これらの都市（今市、鹿沼、佐野、黑磯、馬頭、烏山）に馬市が立つのも、周圍の村落から都市への交通的結帶が、村落と都との、交通によつて經濟的關聯が保たれてゐる事を立證して居る。』等である。雷に就いては栃木縣に於ける雷の發生地から雷神と落雷の分布に及んだ面白い解說である。兎も角この興味に滿ちた圖譜刊行事業の健全な續行を望んでやまない。（S）

○埼玉縣地誌　前田虎一郎著　四六版一八四頁

古今書院發行　二月　定價一圓二十錢

新しい地理學的眼孔を通じて出來上つた府縣地誌が續ぎ續ぎに公にされてゆくのは愉快である。爰に山形縣地誌（地球第二十卷第四號參照）の紹介を見たが茲に帝都に近い農業縣埼玉縣の地理學的記述を得たことは日本地誌界の幸である。然かも手頃な簡潔な、と云つて自然地理の記載をもゆるがせにしないこの書は埼玉師範學校の教職にある著者の三年間の

努力としては洵に立派なものである。現在の農業時代から帝都の影響を多大に受けながら商工時代へ移らうとしてゐる本縣は今後も人文地理學の對象として興味深い處である。從つてこの小冊が研究者に其の發足點を與へる事は確かである。一二の注意の足らなかつた點を擧げて見ると『本縣の農産總額は……凡そ六千萬圓程度で、その中一千萬圓以上のものは米と繭で、二百萬圓以上のものは麥・甘藷・里芋等である。』とあつて主要農産物價額の圖表には臺地・丘陵地間の浸蝕谷によく栽培される里芋は抜けてゐてそれより少額の馬鈴薯以下が擧げられ、且里芋の産額の圖表には價額が百〇三萬餘になつてゐて二百萬圓以上にはなつてゐない。魯魚の誤は多くはないが高崎線が私線であつたり東武鐵道の本線が明治二十二年に創設されたなどは少々目障りである。(N)

○石油地質學通論　大村一藏著　岩波書店發行

定價貳圓八拾錢

日本石油會社の地質課長としてその道の權威とされる著者が諸大學での講義や岩波講座で述べた原稿を擴大充實したものと云ふ。第一篇は石油及石油類の性質で要領よく常識的に解説し、第二篇が石油鑛床學通論で本書の眼目一五〇頁を占める。石油鑛業と云ふ應用的方面から離れて見ても、褶曲地質構造に關する邦文參考書として最も委しいものであり、且つ實際油井で知る構造は他の想像的の多くのものよりも實證的なる點に於て貴重な資料となるものである。第三篇は石油の地質時代的分布、第四篇は石油の成因で謙讓な態度で諸家の學説を紹介批判しつゝ「本邦油田に就ては腐泥説を適當と信ずるものと云ひ得る」と著者の見解を述べてゐる。邦書として從來當然有るべくして存在せざりし本が、よき著者を獲て出版されしを慶祝する。しかも浩革の挿話なども隨處に入つてゐて決して堅苦しき感を起させない。新術語・新譯語も多數紹介され、更に礜(reservoir)・昕(Barrel)等の新字迄紹介されてゐる。參考書目を入れて菊版二九六頁、外に和文英文の索引三三頁で完璧に近い。嘗て本誌に連載された本邦の油田地質の地方的記載のない事が惜しいが、序文にあるやうにかやうな各論が早く出版の機有らん事を評者も希望して止まない。(尾山生)

○漁村民俗志　櫻田勝德著　東京一誠堂發行

定價一圓五十錢

四六版二一五頁昭和六年以來著者が日本の海岸ことに四國九州の海岸で得られた見聞録であるが、海の人々、漁祭と信仰、船と航海の三章から成立し、各地の海員の土俗が面白くしるされてゐて、昭和の今日にも稍古い時代の餘韻が到る所にのこつてゐるといふことが明となり、なつかしい海國民の過去を學ぶ上に、參考とするところが多い。筆者は之を繙いて一氣に讀みつゞけて、いかに多く教へられたかを告白して著

者に感謝をさゝげる。（藤田）

○朝鮮　緬羊及緬羊事業特輯號　昭和九年二月發行　定價三十錢

雜誌朝鮮の二月號を全く緬羊號にしたものである、鎌田清一郎氏は、羊毛の國產自給を以て目下の急務なりと信じ、宇垣總督の南棉北羊といふ標語よりも更にすゝんで日本に於ける緬羊の發展を企て東北に於ける現況からホームスパンの實際は勿論、北鮮及東北に於ける緬羊飼育の好成績實例をのべて、飼育方法、農村副業としての經營方法からその生產物の處理等二十五節にわたつて詳密に論述された、近頃特筆すべき著述である。菊版二八八頁の大冊で、文章の明快なのが何よりである。朝鮮印刷株式會社（京城蓬萊町三ノ六二）へ直接かけ合つてこの冊子一部だけでも買うて讀まれることをすゝめたい。（藤田）

雜報

○印度の大地震　一月十五日(月)午後二時四十分印度のビハール地方よりネパール國東南部に大地震が起り非常な慘害を起した事は既に新聞紙に報ぜられた處である。

此の地震による被害はカルカッタでは甚だ少く、大建築造、大寺院等に龜裂が少々入つた程である。然るにビハール州に於ける損害は死者六千を超え、人口一萬乃至六萬の都會十二箇以上が全く破壞された。其の被害の最も大なる部分は此の州の北部地方にして例へばダルバンガ(人口六萬)、ムザツアアルプール(人口四萬三千)、モチハリ(人口一萬八千)等が代表的のものである。然し同州の首府なるガンヂス河畔のパントナでは被害は遙かに少く死者五〇、負傷者數百、倒壞四千との事である。

此の度の地震で被害の人民の死傷に次いで大なるものは農作物に對するもので、其の主要農作物たる甘蔗の損害最も甚しく二十萬エーカーが無收穫に陷つた。此の外間接の打擊として飲料水供給が十分出來なくなつた爲め、今後起るべき傳染病の流行が將來の被害として特に怖れられてゐる。

ネパールに於ける損害も頗る甚しく首府カトマンヅ市に於いて家屋の五分の一が全壞した程で、其のビハール北部と國境を接する地方は之より甚しい損害を受たものと思はれる。

餘震は翌日午前パントナにて感ぜられ、又た二月十二日にもカルカッタから報ぜられてゐる。

英國にては政府が之が救濟手段は講ずるは勿論、皇帝よりも御下賜金あり、又たゼネバの萬國赤十字社本部よりも見舞金が送られた由である。

○高級林業の提唱　本多林學博士の提唱さるゝ高級林業とは、我國地積の六割に達する山林に於てトチ・クヌギ・ナ